

令和 8 年 3 月 2 5 日	病虫害発生予報 4 月号	茨城県病虫害防除所
---------------------	-------------------------------	-----------


機械での転落・転倒・はさまれなど農作業事故が増加する季節です。
危険箇所を確認し、余裕を持った作業を行いましょう。

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
イチゴ：うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類	1
促成ピーマン：うどんこ病	2
促成トマト：黄化葉巻病(タバココナジラミ)	3
○麦類赤かび病の防除を適期に行いましょう！	3
【その他の病虫害】	
イチゴ、促成・半促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ	4
○サツマイモ基腐病の防除対策	5
○水稻における紋枯病の防除対策について	6
○イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除について	6
【防除所レポート】	
チャバネアオカメムシの越冬状況（令和8年2月調査）	7
II. 今月の気象予報 8	

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>) で確認することができます。

詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200
ホームページでは病虫害・フェロモントラップ・農薬関連情報をご覧いただけます。
<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



※病虫害の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病虫害の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病虫害防除所等の指導機関にお問い合わせください。

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、発病果率（本年値 0.5%、平年値 0.02%）、発生地点率（本年値 20%、平年値 6%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。
- ⑤ 薬剤によっては、果実に汚れが付くものもあるので、十分注意する。

2. アブラムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生葉率（本年値 3.4%、平年値 1.7%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 30%、平年値 29%）は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① アブラムシ類は増殖が速く、多発すると葉や果実にすす症状を生じるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

(イチゴ 続き)

3. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生葉率（本年値 32.2%、平年値 18.2%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 50%、平年値 58%）は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速く、多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

(令和7年12月23日発表 病害虫速報No.7 参照)

促成ピーマン

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、発病度*（本年値 13.3、平年値 2.5）は平年より高く、発生地点率（本年値 50%、平年値 27%）は平年よりやや高い。

※発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成トマト

1. 黄化葉巻病（タバココナジラミ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、発病株率（本年値 1.4%、平年値 0.2%）、発生地点率（本年値 30%、平年値 7%）ともに平年より高い。
- ② 3月中旬現在、一部圃場においてタバココナジラミ成虫の発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。
- ② タバココナジラミは多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ③ 媒介虫であるタバココナジラミの施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットを設置する。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ④ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、タバココナジラミを捕殺する。
- ⑤ 雑草はタバココナジラミの生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。
- ⑥ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、タバココナジラミの薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑦ 黄化葉巻病耐病性品種は、ウイルスに感染しても発病は抑制されるが、感染株は本病の伝染源になるため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。

麦類赤かび病の防除を適期に行いましょう！

麦類赤かび病の防除適期は、六条大麦では出穂～穂揃期に開花を確認した時（出穂期の3日後頃）、二条大麦では穂から蒴殻が出ていることを確認した時（出穂期の12～14日後頃）、小麦では開花始期～開花期（出穂期の7～10日後頃）です。

予測される出穂期および防除適期は麦種や播種期によって異なるため、圃場ごとに出穂状況を確認して適期に防除しましょう。

なお、麦類の予測出穂期および赤かび病の防除適期は病害虫速報での発表を予定しています。防除所ホームページ等からご覧ください。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	灰色かび病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
	アザミウマ類		
	コナジラミ類	発生量：平年並 ～やや少ない	3月中旬現在、平年並～やや少ない発生である。
ピーマン 促成	コナジラミ類	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。
ピーマン 半促成	アザミウマ類	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
トマト 促成	灰色かび病	発生量：平年並 ～やや多い	3月中旬現在、平年並の発生である。 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。
促成キュウリ	べと病	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。
	褐斑病		
	黄化えそ病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
	退緑黄化病		3月中旬現在、平年並の発生である。媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。

サツマイモ基腐病の防除対策

【植付前の準備のポイント】 苗の消毒！ 圃場の排水対策！

植付前に苗は必ず消毒しましょう（基腐病を持ち込まない対策）

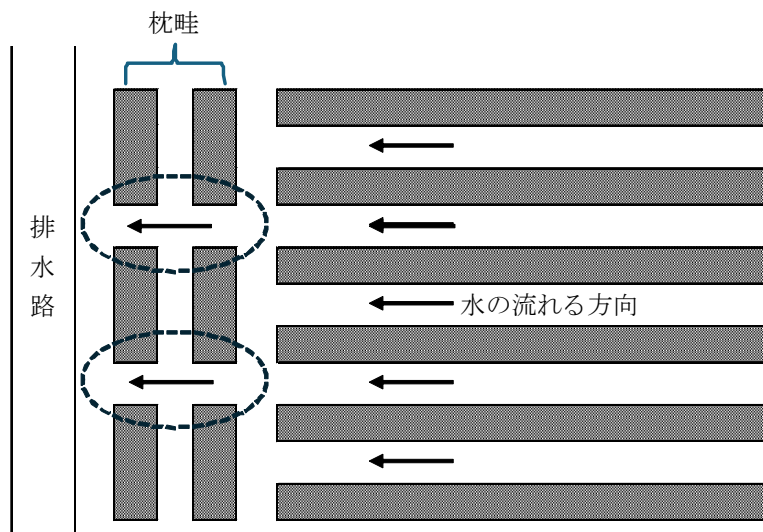
※いも苗に、基腐病や他の病害の症状がないか、採苗前に必ず確認！

↓
基腐病の発生が疑われる場合は、速やかに普及センターへ連絡してください。

- 採苗時のハサミはこまめに丁寧な水洗とふき取りを行う。
- 苗は地際から5 cm 以上離れた位置で切る。
- 採苗した苗は、採苗後、速やかに苗消毒する。
- 苗消毒用の薬液は使用当日に調製し、登録の内容に従って浸漬処理を行う。
- 切苗を購入する時は、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒を行う。

排水対策を行い、圃場に水が溜まらないようにしましょう（基腐病を増やさない対策）

- 排水しやすい向きに畦を立てる。
- 枕畦は圃場表面の排水を妨げるため、圃場に水が溜まってしまう。
→（対策）枕畦を作らない。
作る場合は、枕畦の途中を区切って排水溝を作る（図点線）。
- 植付前に、排水路に土砂等が詰まっていないか確認する。



水稲における紋枯病の防除対策について

水稲の紋枯病は、イネの病斑上に形成された菌核が圃場にとどまり次作の伝染源となるため、毎年同じ圃場で発生しやすい傾向があります。近年、発生が認められている圃場では特に注意して対策を行いましょう。

[特徴]

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核で越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇して株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し始め、楕円形病斑をつくる。本病にかかると下葉からしだいに枯れ上がり、イネの茎が弱くなって倒伏しやすくなる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 代かき時の浮遊物に菌核が混入しているので、畦畔沿いにたまったごみを取り除き、適切に処分する。
- ② 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。
- ③ 常発圃場では育苗箱施用剤を使用する。

イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除について

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、多発すると減収する病気です。発病してからの治療はできないため、ヒメトビウンカの防除が重要です。

令和8年1月下旬～3月上旬に県西、県南、県央地域15地点の水田畦畔等からヒメトビウンカ越冬世代幼虫を採集し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しました。その結果、15地点中8地点において、保毒虫率の値が、育苗箱施用等による薬剤防除が推奨される5%以上*となりました。

今後、ヒメトビウンカの発生量が多くなると、イネ縞葉枯病の発生が多くなるおそれがあるため、育苗箱施用によるヒメトビウンカの防除を行うとともに、耕種的防除を組み合わせた総合防除により、本病の対策を徹底しましょう。

※農業研究所作成のマニュアルによる
(令和8年3月18日発表 病害虫速報 No.8 参照)

チャバネアオカメムシの越冬状況（令和8年2月調査）

ナシ、カキ、リンゴなどの重要害虫であるチャバネアオカメムシ（写真）について、越冬数の調査結果をお知らせします。

本年2月上～中旬に山林の表層土を含んだ落葉を1地点当たり300採取し、チャバネアオカメムシの越冬成虫数を調査しました。落葉の採取は常陸太田市、水戸市、笠間市、小美玉市、茨城町、行方市、鉾田市、石岡市、つくば市、桜川市の合計42地点で行いました。

その結果、越冬成虫数（本年値2.1頭、平年値2.3頭）は平年並、越冬地点率（本年値55%、平年値41%）は平年並～やや高くなりました（表）。

本年を含む過去11年間の越冬状況の推移をみると、越冬成虫数・越冬地点率ともに多い年と少ない年を交互に繰り返しており、本年は多い年にあたります（図）。また、過去11年のうち越冬成虫数・越冬地点率ともに多かった年の越冬世代成虫の果樹園への飛来数（4～7月）は、平年よりやや多い値で推移する傾向にあります（データ省略）。そのため、令和8年の4月から7月までの越冬世代成虫の飛来数は平年よりやや多いと予測されます。

病虫害防除所では果樹カメムシ類について、予察灯調査（4～10月）や、サクラにおける発生量調査（4～5月）を行いますので、今後発表する情報を参考にしてください。

表 チャバネアオカメムシの越冬状況

調査項目	令和8年2月		平年 ³⁾
	調査値	順位 ²⁾	調査値
越冬成虫数(頭) ¹⁾	2.1	5位	2.3
越冬地点率(%)	55	4位	41

1) 成虫数/落葉30リットル

2) 本年を含む過去11年中の順位

3) 平成28～令和7年の平均値



写真 チャバネアオカメムシ（成虫）

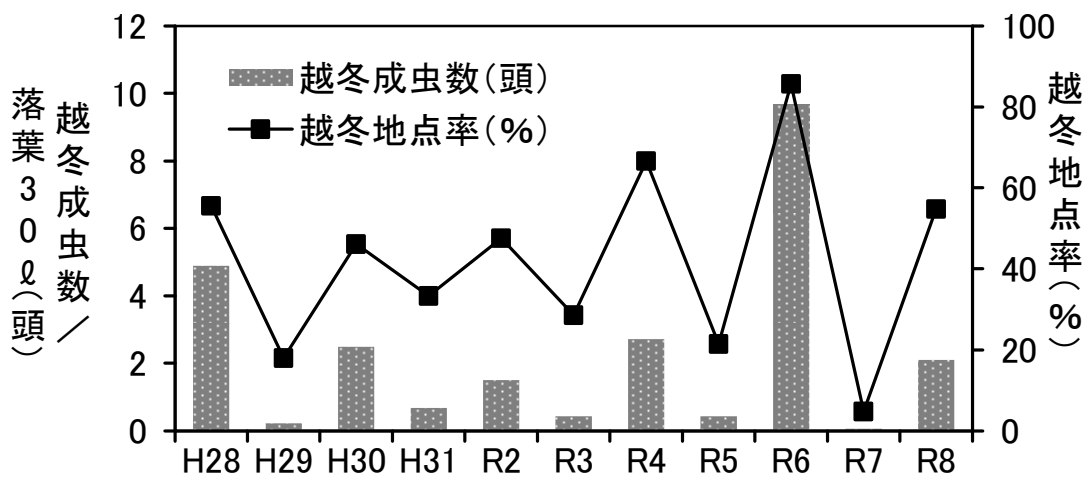


図 チャバネアオカメムシの越冬成虫数及び越冬地点率の年次推移

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 3月21日から4月20日)

気象庁(3月19日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	10	10	80
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	50	30	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 3月21日(土曜日)から3月27日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確立80%

<2週目の予報> 3月21日(土曜日)から3月27日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率80%

<3週目から4週目の予報> 3月28日(土曜日)から4月10日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率70%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。